

# “熱狂の日”音楽祭2009

## ～モーツァルトと仲間たち～

取材・文=中 東生

Text=Shinobu Naka

写真提供=ラ・フォル・ジュルネ  
金沢音楽祭実行委員会

東京に続き日本で2都市目の開催地に選ばれた金沢。元祖はフランス、ナントで95年に始まったフェスティバルであるが、「2回目は勝負の時」と言うアーティストック・ディレクター、ルネ・マルタンの緊張感をよそに、開催2年目の金沢は力まない盛り上がりを見せ、もう何十年も続いているお祭りのように、自然に人々を惹き付けていた。



**昨**年のベートーヴェンを経て、今年度は、ウイנקをしたボスターが街を賑わせていたイラスト・モーツァルトがテーマ。人物としては十分茶目っ気があったのに、その音楽は堅苦しく演奏されがちなモーツァルトが、金沢で初めて本来の姿で蘇り、皆と一緒に遊んで回っているような祭りだった。

無料・有料を含めた公演総数は157に達し、集客数は去年より10パーセント増加した。一番改善された点は、有料公演を全自由席から全指定席に変えたことで、聴衆はコンサート直前まで他のイベントも楽しめるようになった。それでも主要会場が4カ所、それ以外にもレヴェルの高い無料コンサートが盛りだくさんで、全てを観られないのが残念なくらいだ。聴きそびれたコンサートも多々あることをふまえた上で、特に印象深かったものをいくつか挙げてみたい。

特筆すべきは、5月3日に石川県立音楽堂コンサートホールで演奏された「ピアノ協奏曲第27番」、井上道義率いるオーケストラ・アンサンブル金沢（以下OEK）がアンヌ・ケフェレックをソリストに迎えたコンサートだった。ケフェレックのピアノは色彩豊かで、雄弁だ。彼女の音と一緒に、聴衆は歌い、泣き、ため息をつく。上品で誇張しないのに聴衆の胸に迫ってくる彼女のピアノと透明なオケの響きが、化学反応を起こしているように、どんどん研ぎすまされていき、終わった時には演奏者、聴衆全てが昇華されたようだった。井上はその感情を素直に吐き出し、ケフェレックに驚嘆と敬意を表しているのが客席からもはっきりと見て取れた。聴衆はもちろんスタンデ

イングオウエーションで感動を表現した。3人ほど、泣いていた団員もいたらしい。ケフェレック自身も、「今までに何度も弾いている曲なのに、こんなに涙かっただのは初めて」と、すぐに公演模様の録音をもらえるように手配したという。

翌4日に同音楽堂内邦楽ホールで、OEKのメンバーが演奏したコンサートは聞き慣れた曲なのに新鮮な驚きであった。輝かしく、透明な「ディヴェルティメント」、表情が豊かで、緩急のめりはりが素晴らしい《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》、そして子供はもちろん大人まで皆笑顔にさせるチャーミングな音を奏でた《おもちゃ交響曲》で、聴衆は大満足であった。その45分後には、仲道郁代をソリストに迎えたコンサートホールでのピアノ協奏曲第21番で、ロマンティックで上品な彼女の音楽を、エレガントな音色で支えていたOEKは本当に多才だ。

OEKの弱点はオペラ・アリアのコンサートで露呈した。前日の《戴冠式ミサ》と同ソリストだったが、ミサではベルカントよりの歌唱で耳に心地よかったテノールのフォウラー以外、多少の不満が残っていた。メゾのジャコヴァは声がよく当たっていたのに、オケを突き抜ける響きに欠け、バリトンのストイコフの声も立派なのに、少々棒歌いだっただ。ソプラノのイヴァノヴァは線が細く、声の焦点も曖昧で、不完全燃焼のような気持ちは聴衆に残したのだが、その名誉挽回のように、オペラ・アリア・コンサートでは4人全員が実力を出し切った好演だったのである。

### 「アマチュアの参加が伸びたのは嬉しい」

——ルネ・マルタン記者会見

フェスティバル最終日、LFJの発起人であるマルタンとOEKの音楽監督、井上道義に加え、フェスティバル実行委員と石川県立音楽堂館長、そして今回、世界未公開のモーツァルト直筆譜を展示するため、フェスティバルの発祥地であるナント市から初めて出されるにあたって、直々に持参したナント市立図書館長も同席した会見が行われた。

2年目の開催となる金沢についてマルタンは、「昨年比べて観客動員数も10パーセント増加し、このフェスティバルの主眼である、アマチュア、プロを含めた音楽の共有、が成功し、アマチュアの参加が大きく伸びたのは嬉しい」と語り、井上は、「OEKのチケットが即完売し、立ち見まで出た」と、2人とも別の観点から、成功を喜んでた。

来年のテーマは生誕200年目にあたるシヨパン。「ワルシャワ市からのフェスティバル開催依頼を受けて、初めて、LFJ開催都市共通のテーマとする予定です。それによって、全ての都市の音楽祭が、ポーランド政府公認行事として認定されることになりま

す。プログラムには、シヨパンの全楽曲——ピアノ・ソロ、ピアノ協奏曲室内楽はもちろん、シヨパンがコンサートで弾いた全曲のデータも収集中で



## LA FOLLE JOURNÉE de KANAZAWA

しかし、オケがついてこない。残念なあまり楽団員に声をかけると、「練習量は他のプログラムと同じくらい」と涼しい顔。オペラハウス専属オケ以外で、「オケだけで1回、歌手つきで1回。GPなし」というのは無理があるだろう。それでも聴衆は大満足でホールを後にしていたのは事実だ。やはり、多彩な好演奏を聴かせてくれたO.E.K.には、ラ・フォル・ジュルネの成功はあり得ないと言えよう。「ラ・フォル・ジュルネの開催候補地の第一条件は、素晴らしい音響のホールと高レベルなオケ」というマルタン氏の言葉通りの結果となった。

その他無料コンサートでも、天理高校吹奏楽部を筆頭に、プロも顔負けの押し出しの強い音とモーツァルトが聴いても満足しそうなアレンジに乗ったプラスバンドが華を添えていた。青島広志のモーツァルト講座はいつも満員だし、金沢大学教育学部の学生による子供も一緒に踊れるリトミックコーナーや、釣り堀、乗り物まであり、楽器店協賛の楽器体験コーナーなど楽しい催しに溢れていた。そしてどこも、ポジティブな気が充満していた。街おこしが叫ばれる昨今、これ以上の地域アピールはないのではないか。

オペラ・アリアのコンサート終了後、夜の女王の有名なフレーズを鼻歌にしながら歩く父娘に会った。10歳くらいの女の子は「モーツァルトが身近になったので、ピアノでもう一度《トルコ行進曲》を頑張りたい」と語る。次世代に引き継がれていく音楽はこうして育てられるのだ。文化的地盤の整った歴史を持つ金沢が、日本に、世界に、その手本を見せて欲しいと願ってやまない。

す。シヨパンに関わる音楽全般を紹介  
します」(談)  
(中東生)